

姉妹州協定 50 年記念事業

## 19年ぶり！ 富田人形公演 in ミシガン

1968年、滋賀県とミシガン州は、琵琶湖と五大湖という日米両国を代表する「湖」を有する縁から姉妹州協定を締結しました。2018年は本協定締結から50年目という節目の年になります。

この長きにわたる友好交流の記念事業として、長浜市富田町に伝わる人形浄瑠璃「富田人形」が富田人形共遊団の皆様により、2018年10月5日（金）、6日（土）にデトロイト市のデトロイト美術館にて、また8日（月）にはイーストラッシング市のミシガン州立大学にて公演され、駐在員もお手伝いをさせていただきました。

本格的な日本の伝統芸能「人形浄瑠璃」がミシガン州で鑑賞できる稀な機会ということもあり、連日会場は大入り。来場者の90%以上は日本人以外のお客様であったことから、日本文化への関心の高さがうかがえました。

美術館では、「寿式三番叟」、「傾城阿波の鳴門」、「伊達娘恋緋鹿子」の3つの演目、州立大学では「伊達娘恋の緋鹿子」を除く2つの演目が披露されました。

「寿式三番叟」は軽快な音楽に合わせて2体の人形が舞台狭しと踊る祝いものの演目。踊り疲れた人形が扇子で顔を仰ぎながら、着物の袖で汗を拭うしぐさは、人形とは思えないリアルさで、会場からは時折、笑い声があがりました。

「傾城阿波の鳴門」は、幼い頃に生き別れた母と娘の偶然の再会と辛い別離を描いた世話物の演目。別離のシーンでの太夫（語り手）の語りと三味線の音が2体の人形の心理、情景を見事に表現し、観客の涙を誘いました。

最後の演目は、八百屋お七で有名な「伊達娘恋緋鹿子」の「お七火の見櫓の段」。最愛の人を命がけで救うため、お七が櫓に登る見せ場のシーンでは、人形遣いの姿が客席からは見えず、人形が自ら櫓を登っているように見え、それまで静かに鑑賞していた観客からは感嘆の声があがりました。



涙を誘う別離のシーン  
（傾城阿波の鳴門）



How is she climbing?  
（伊達娘恋緋鹿子）



大入り御礼  
（デトロイト美術館公演）

各演目の前に英語によるあらすじ解説は行ったものの、全て日本語での公演。来場者に理解していただけるかと多少の不安はあったものの、人形遣いの熟練の技と太夫の身から絞り出される抑揚ある語り、哀愁ある三味線の音により、「言葉はわからずとも理解できた。離別のシーンでは涙がでた。」「本当に素晴らしかった。別の演目も見てみたい。」と来場者からはたくさんの称賛の声をいただき、全公演で終了後はスタンディングオベーションをいただきました。

また、とりわけ来場者の皆様に喜んでいただいたのが、共遊団の皆様が大切にされている来場者と人形とのふれあいの時間です。開演前には入り口にて人形がお出迎え。また、各演目の合間には、阿部秀彦団長から人形の構造や操作方法、人形遣い同士の呼吸の合わせ方などの解説をしていただきました。

貴重な人形と直接触れ合える機会とあって、人形の前には長蛇の列ができ、日本の、滋賀の伝統芸能を身近に感じてもらえる貴重な時間となりました。



大変好評をいただいた人形のお出迎え



人形が観客席へご挨拶に

富田人形共遊団では、2003年から毎年夏に2か月間ホームステイをしながら浄瑠璃を学ぶ留学生向けプログラムを続けておられ、これまでに世界各国から272名を受け入れ指導されてきました。プログラムのきっかけは19年前ミシガン公演（1999年8月）。公演を見たミシガン州立大学の学生が翌年、長浜の富田人形会館を突然訪れ、「人形を教えてほしい！」と懇願。「とても困りましたよ。でももう目の前にいましたから・・・しょうがないですね。」と、当時のことを苦笑しながら話してくださいました。「今では世界中に息子・娘がいて幸せ。」とも。今回のミシガン公演には、2年前にプログラムに参加した学生がウィスコンシン州から駆け付け、団員らと再会。懐かしい思い出話に花を咲かせました。彼らは、長浜市富田町を第二の故郷と言い、阿部団長らと一緒に食べた「ういろう」が大好きとのこと。「大学卒業後は日本で英語を教えたい。故郷長浜でできるなら最高！」と流暢な日本語で将来を語ってくれました。



再会を懐かしむ学生らと阿部夫妻